

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると(使徒 2:1)」。一同とは、使徒やイエスの家族、ガリラヤからの女たち(1:14)。肯定的に言うのだが「寄せ集め集団」だ。そんな一同が、最後の晚餐以来の「二階(1:13)」で「心を合せて熱心に祈っていた(1:14)」。

五旬祭が「来て」を直訳すれば「満ちて」。キリスト復活の後、あの二階で、一同で心を合せて祈る日々が、五旬祭に「満ちた」。五旬祭(ペンテコステ)は時が巡って「来る」が、聖霊降臨は祈りが「満ちて」起こる。

ただ間違えないでほしい。祈りの効能で「起こした」のではない。「激しい風(聖霊)」は思いのままに吹くから(2:2)。

「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった(2:3)」。炎のような舌が各々に与えられる。実に印象的だ。心を合せて祈る(1:14)一同(2:1)の、一人ひとりが炎の舌を得る。

祈る一同、激しい風、炎の舌。ふと「燃える薪」が思い浮かぶ。薪は一本では燃えつかない。幾分か薪を「人々」の文字に据えて着火し、風(霊)が吹くと、薪同士が干渉し合って大きな炎となる。

八木重吉の「愛の家」という短詩、「まことに 愛にあふれた家は／のきばから 火をふいているようだ」。

これだけだが、重吉の、悲しく激しい信仰的な直感が、聖霊降臨の様を捉えている。キリストの体である教会はまさしく、聖霊が降臨することで地上に現われる「愛の家」に他ならない。

一人ひとりの上に留まる「炎のような舌(2:3)」は、各々を「霊」で満たし「ほかの国々の言葉」で語らせる(2:4)。その外国語は多岐にわたるが(2:9~11)、馴染んだ言語で聞いた者は、諸国のユダヤ教徒たち(2:5,11)。

彼らは母語で聞く「神の偉大な業」に驚きとまどったが(2:12)、傍から見れば酔っ払いの戯言だった(2:13)。ということは、ガリラヤ人(2:7)が多種多様な外国語を「喋った」のではなく、意味不明な異言を、諸外国に暮らすユダヤ教徒が心の深部を震わせる母語で「聞いた」のだ。

聖霊は、私たちの存在の深みを呼び覚まさせ、こういう形で「神の偉大な業」を告げ知らせる(2:11)。

預言者エレミヤは、呻くがごとくに告白する。「主の名を口にすまい、もうその名によって語るまいと思っても、主の言葉は、わたしの心の中、骨の中に閉じこめられて、火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして、わたしは疲れ果てました。わたしの負けです(エレミヤ 20:9)」。

預言者は徹底した聖霊の器だが、心を合せて祈る私たちにおいても(使徒 1:14)、祈りが満ちると、存在の深みから「主の言葉」が燃え上がる。

この地、八ヶ岳の「二階」で祈りながら私たちは幾度か経験して来た。

聖霊は、私たちの「心の中、骨の中」から、「主の言葉」を火のように燃え上がらせる(エレミヤ 20:9)。

外側の、義務や道徳、理想や期待によって「動かされる」のではない。内側の、燃え上がる真の主体性「主の言葉」で自ずと「動く」。

聖霊(主の言葉)で「自ら」動くなら、担う課題がいかに大きかろうとも、陰鬱な重荷になることはない。何かを試みて、気持ちが萎えたなら、それは聖霊の業ではない。

私たちは、世という「一階」の混乱を恐れない。「愛の家」の二階で心を合せて祈り続けているから。



《おまけのひとこと》

理性は 心の内側と外側を調停する だが外側に侵食されて 内側の霊の歌を聴かないことがある
実は聞こえているのに 硬直した理性は放棄し 柔らかい理性で調停し直す そのくり返しが信仰